

日産科学振興財団 理科／環境教育助成 成果報告書

回次：第 4 回 助成期間：平成19年11月1日～平成20年10月31日（期間1年間）

テーマ：「アーティストの視点に立つ」ワークショップの開発

氏名：岡田 猛

所属：東京大学大学院情報学環

登録番号：07105

1. 課題の主旨

誰もが子どもの頃は、毎日のように絵を描いたり歌を唄ったりする創造者であっただろう。ところが、中学、高校、大学と成長するにつれ、いつの間にかほとんどの人が創造の楽しさを忘れ、表現から離れていってしまう。本実践は、申請者がこれまで蓄積してきた「創造性」に関する認知心理学的な知見を基に、「創造」という営みがどのような過程を経てなされているのかを、アーティストとのワークショップを通じて学習させる試みである。特に、「人並み外れた才能が必要」「難しい」というステレオタイプがついてまわることも多い「創造」や「表現」に対するイメージを身近なものに変化させ、もう一度学生に「自分の表現者としての側面」に気づいてもらうことを狙った。

2. 準備

実践を行うための準備としては、主に3つのことを行った。

一つは、実践の効果を測定するための尺度の開発である。大学生を対象に予備調査を実施し、人々が持つ「創造表現に対するイメージ」や「アートに対するイメージ」を捉えるための尺度開発を行った。

二つ目は、実践参加者に、ワークショップの感想を書き込んでもらうための、web pageの作成である。他者の投稿に対してコメントを挿入可能なblogの形式をとることで、参加者が自由に議論をするための場を設けた。

三つ目は、現代アーティストと打ち合わせを重ねながら、実践の内容を詰めていく作業である。ワークショップの中でどのようなことを行うかを決定した。

3. 指導方法

大学1、2年生対象の一般教養の授業の中で、約20名を対象にワークショップは行われた。この授業は、創造活動や美術展示のあり方などをゼミナール形式で学んでいくものであり、ワークショップの他は、美術や創造についての講義や、学芸員等の講演が行われた。

現代アーティストによるワークショップは、6月5日から、3週にわたって実施された。基本的にはアーティストが講演を行いながら、参加者も自ら作品創作を行うというかたちをとった。また、専用のweb pageを作成し、そこでワークショップの中で感じたこと、考えたことを、自由に議論してもらった。

ワークショップ終了後は、美術創作や創造性に関する認知心理学の知見を、講義形式で紹介した。それによって、ワークショップの中で参加者自身が行ったことと、熟達したアーティストが日頃実践している活動との統合を図った。

4. 実践内容

1) 実践の内容

①アーティストによるワークショップ

創造や表現に対して苦手意識や抵抗感を持つ人は多い。その背景には、「絵がうまくなければならない」「特別な発想が必要」などといったイメージがあり、それが認知的な制約となって機能している可能性が指摘される。そこで、まずそのような創造表現に関する制約を外し、参加者に表現のより大きな可能性を実感させられるようなワークショップを行った。

ワークショップは、現代アーティスト篠原猛史氏を講師に迎え、計3回行われた。それぞれの授業では、点による表現、線による表現、面による表現についてまずアーティストが講義をし、続けて参加者は自らイメージを膨らませ、画用紙の上に作品を作り上げていった。また、アーティストは即興でドローイング作品を描くなどし、表現のプロフェッショナルの姿を参加者へと伝えた。

②創造過程に関する認知心理学的知見の講義

多くの人は、プロのアーティストがどのようにして作品を作り上げているか、その過程を知らず、またアーティストが何を考えながら創造の営みを行っているのかについて考えが及ばない。このことも、上記の認知的な制約が払拭されないでいる要因の一つだと推測される。そこで、篠原氏の3回ワークショップに続いて、申請者の研究室がこれまで一貫して追求してきた、「芸術創作プロセスの認知心理学的研究」の発表を行い、プロのアーティストがどのような思考過程によってアイデアを創出し、創造的な作品を作り上げているかを教授した。

2) 評価の内容・方法

①web page 上の議論の分析

ワークショップに合わせて、実践を通じて参加者が考えたこと、思ったことについて議論するためのweb page を開設した。その分析によって、この実践が参加者にもたらしたインパクトを明らかにした。

②質問紙調査

ワークショップ開始前と終了後に、2度質問紙調査を行った。その比較によって、ワークショップを通じて参加者にどのような変化があったかを、統計的に明らかにすることを試みた。

5. 成果・効果

1) ワークショップ内での活動と、Web 上でのディスカッションによる実践評価

実践に合わせてweb 上にblog を開設し、アートや創造表現について考えたことを議論させたところ、参加者は実践の中で自己表現と真摯に向き合い、表現に対する認識を大きく改めていたことが確認された。また、篠原氏のドローイングのインパクトは極めて大きく、多くの参加者が創造の現場を初めて目の当たりにし、感動を覚えていた。

2) 質問紙調査による評価

ワークショップへの参加前後に学生に対して質問紙調査を行い、創造表現に対するイメージや態度にどのような変化があったかを検討しようと試みた。尺度の因子ごとに事前・事後の得点を比較した結果、どれも有意な変化と認められるほど顕著なものではなかった。その原因の一つは、類似した項目を短期間で2回行う質問紙調査という方法に起因するものであるかも知れないが、同時に3日間という短い期間の実践では、長期的な変化を引き起こす上で限界があることが示唆されたとも言える。

6. 所 感

質問紙調査からは有意な結果を導出することが出来なかったが、このワークショップの過程、及び、参加者が web page で行った議論などからは、創造表現を促進するための教育方法に関する、様々な洞察を得ることができた。

例えば、アーティストが作品を作り上げるその場を共有することは、一般の人々に大きなインパクトを与えることが明らかになった。その緊張感や迫力は、創作のイメージを変えると同時に、表現への動機づけを強く刺激することが分かった。

そこで、ここで得られた知見を援用し、2008年10月9日から12月7日にかけて駒場博物館で行われている特別展、「behind the seen 創作の舞台裏」の中で、「創造の迫力」を伝えることのできる展示物を設置した。具体的には、篠原氏のドローイングの様態を、カメラ複数台を用いて撮影した。また、高音質のマイクで篠原氏の息遣いや描画中に発生する音を撮影した。それらを組み合わせ、新たに篠原氏の創作の様子を知ることができるインスタレーションを作り、展示の一つのコーナーとした。来館者の反応をアンケートや観察から観察したところ、この展示物は、助成を受けて行ったワークショップと同様に、強いインパクトを与えていた。

また、この実践を通じて、人々が創造や表現から遠ざかってしまう要因の一つとして、「表現に対する制約されたイメージ」の存在が実証されたと考えられる。学校における美術教育の中では、イメージを描き、形にすることよりも、まず技術を習得することが先行する。それは、「美術表現はこうでなければならない」という狭い捉え方につながり、結果として、多くの学習者が苦手意識を形成してしまったり、閉塞感を抱いてしまっている。多くの学生がそのようなイメージをもともと持っていた故に、篠原氏によるワークショップによって、認識を変化させたと言えるであろう。さらに、そのような制約されたイメージを取り除くための具体的な方法として、表現のプロフェッショナルが創作に向かう姿を見せたり、実際の創作の過程に関する知識を与えることがある程度有効だということも、本実践を通じて得られた洞察だと言える。

7. 今後の課題や発展性について

学生に自らの「表現者としての側面」を再確認させることを目的とした本実践であったが、今回は、「考え方やイメージの変化」という部分までしか確認しておらず、それによって実際に日常生活の中で意識的に表現や創造をするような機会が増えたか否かは確認できていない。また、先に述べた通り、短期間での実践の限界も示唆されている。そこで、今後の課題としては、1) 人々に創造や表現をより身近に感じさせ、日常的の一部とさせるための、より長期的なプログラムの開発、及び、2) それを確認するための評価法の確立が必要だと言えるだろう。

8. 発表論文、投稿記事、メディアなどの掲載記事

発表論文や記事としては、特筆すべき事項なし。

ただし、本実践を通じて得られた成果の一部は、2008年10月11日から12月7日まで、東京大学駒場博物館で行われている、「behind the seen 創作の舞台裏」展につながっている。